



『週刊ダイヤモンド』に掲載されました。

## 国

家の儀式として国費をもつて執り行なわれる国葬。戦後は意外にも一九六七年の吉田茂が唯一の例だが、これを裏方で仕切ったのが帝都典禮だ。それほど都内では格式のある葬儀社として知られ、これまでは主に法人需要、つまり企業トップの葬儀一式を受託することが多かった。

近年、社会状況の変化やニーズの多様化により葬儀需要そのものが減少しつつあるなか、同社はこれまでの社葬の実績を生かすべくマーケティングの方向性を転換。いきおい向かうのはリテール部門、つまり個人の一般葬だ。

「これまでの個人葬を綿密に調査・分析してわかったのは、必ずしも個々のお客様のニーズにそったサービスが提供されていないということでした」と語るのは、同社企画室長の星野良

自分の葬儀だからこそ、家族や葬儀社に任せっぱなしにするのではなく、生前にきちんとプランニングしておきたい——そう考える人が増えている。何事にも「主体的に」関わってきた団塊世代となればなおさらのこと。帝都典禮が提案する、新しい形の生前予約とは。

## 人生の意義をかみしめ、個性派葬儀を自ら演出する「生前予約」のススメ



自分が望んだ時期、望んだ人に届けられる「天国からのラブレター」。残された者にとっては、愛おしいサプライズとなることだろう

はまだ少数だが、その数は確実に増えている。「見るからにダンディなご老人が奥様を連れて相談にいらっしやいました。自分のライフスタイルを葬儀にも貫きたい。棺もありきたりの白木ではなく、好きな紫色にしてほしいなど細かく指定されました」

その姿が「とてもカッコよかった」と振り返るのは、同社で生前予約の相談にのるフューネラルコンシェルジュの南大輔氏。誰にも必ず訪れる「死」を、まだ元気なあいだに真っ正面から見つめ、自分らしいかたちで最後を演出したいと考える人たちが、帝都典禮はそこに新しい個人葬のスタイルと、マーケティングの存在に気づいたのだった。

**死を想うことで、より充実した生を**

葬儀を準備するとは、自らの死を意識することに、ほかならない。

古くから西洋の教会の装飾には、「メモント・モリ（死を想え）」というラテン語が刻まれているが、それは本来、死を想うことで今の生のありようを意識し、よき生を貫けという人生訓でもあった。そうした死生観

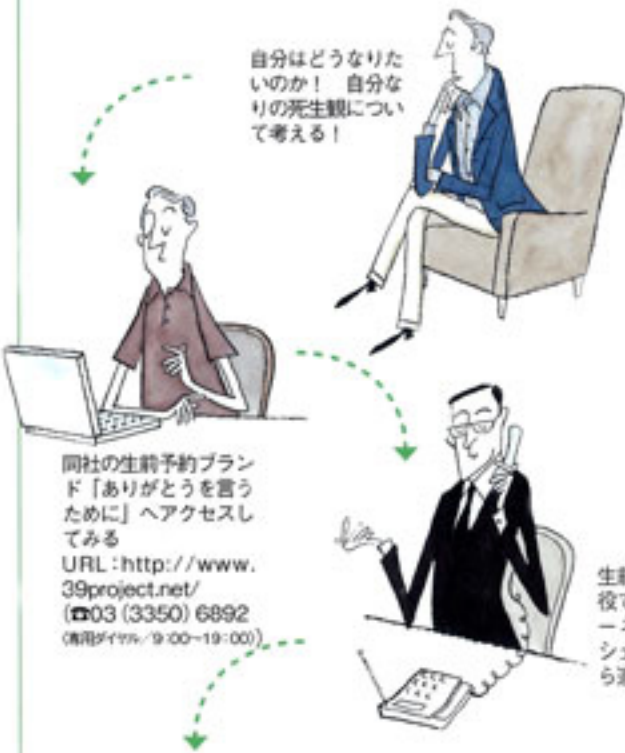
## 生前予約までのプロセス

は宗教を超えて存在する。とはいえ、唐突に「死を想え」と言われても普通の人は困る。死を意識することで、自分の人生を振り返るための、なんらかのきっかけやサポートが必要だ。帝都典禮が生前予約の顧客に必ず渡す「わたしの紹介」と題されたエンディングノートは、そうしたツールの一つ。本人が直筆で記すことで、死後の憂いを払拭し、諸事万端、心の整理をつけていく。

亡くなったあとに遺族に届く仕掛けの「天国からのラブレター」というものもある。遺族の悲しみを癒すグリーフケアの一種だが、同時に、生前は照れてしまっていた伝えられなかったようなメッセージをここに残すことができる。

「生前予約をしたお客様がなにより喜ばれるのは、自分が見送られる姿を視覚的に把握できること」と言うのは、同社企画室フューネラルクリエイターの白石亘氏。

たとえば、自分の描いた



同社の生前予約プラン「ありがとうを言うために」へアクセスしてURL: <http://www.39project.net/> (☎03(3350)6892) (受付時間: 9:00-19:00)

フューネラルコンシェルジュと面談し、好みやこだわりはもちろん、これまで出会った人たち——家族、友人、知人等にどうやって感謝の気持ちを伝えたいかなど、自分の希望をすべて伝える

たとえば過去にこんなオーダーも



言葉にしたい  
音楽にしたい  
自宅葬にしたい

要望に応じてコンシェルジュが立てたカスタムメイドの葬儀コンセプトが提案される。見積書もあるので安心

こちらは、3Dデザイナーによるイメージイラスト。自分の行きたい葬儀の形がリアルに描かれる

お問い合わせ先  
帝都典禮 (営業エリア/関東近郊)  
〒160-0016 東京都新宿区信濃町33番地  
☎0120-191-002  
URL: <http://www.teitotenrei.co.jp/>